

ルルドの聖洞窟模型の日本における展開

—長崎大司教区の築造例を中心に—

The Development of the Lourdes Grottoes in Japan

**— Based on the Analysis of Various Examples of Construction
in the Archdiocese of Nagasaki —**

関根 浩子

Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授

Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：ルルドの聖洞窟模型、日本、長崎大司教区、築造例、類型

Keywords: Reproductions of the Lourdes Grotto, Japan, Archdiocese of Nagasaki, Various Examples of Construction, Types

Summary

There are many reproductions of the Grotto of Lourdes, but so far almost no research has been conducted to clarify the religious, cultural or historical position of such models from the point of view of examples of construction or representation images.

In Japan, as far as I know, there are many such examples in the Diocese of Nagasaki and it is not an exaggeration to say that they embody the process of development of the reproductions of the Lourdes Grotto in Japan. Therefore, in this simple paper, based on the investigation of documents and field as well as written survey results, I have introduced and analysed some examples of construction of replicas, specifically those erected in the churches of the Diocese of Nagasaki. Through this procedure I think I have been able to shed light on the construction of the models of the Lourdes grotto that appeared after the primordial Lourdes-like grottoes erected in Japan—which I had considered in a previous paper of mine—. At the same time, I have tried to classify the models of the sacred grotto of Lourdes.

In Chapter 1, I outlined the current situation of various Roman Catholic dioceses of Japan, beginning with the diocese of Nagasaki. In Chapter 2, I have introduced my surveys and investigations. In Chapter 3, after mentioning the focus points in the overview, I outlined the general characteristics and forms of the reproductions of the sacred cave in each church on the basis of my surveys. Finally, in the fourth chapter, trying to classify such models, I summarized the development and expansion of the reproductions of the sacred grotto of Lourdes.

はじめに

ルルドの聖洞窟模型（ないしは模造ルルド）の世界における築造数は夥しい数に上るが、それらの築造物としての、あるいは表象としての、宗教的、文化史的、歴史的 position付けや全体的把握に関する研究は、現在皆無に等しい。しかし、世界中のカトリック圏の築造例を把握するのは、世界中の研究者が共同研究でもしない限り不可能に近い。

日本においては、ルルドの聖洞窟模型は、稿者が知る限り、九州、とりわけ長崎大司教区に築造例が多く、日本における同模型の発展過程を体現していると言っても過言ではない。そこで本稿では、ささやかではあるものの、書面調査や文献調査、踏査結果を基に長崎大司教区の教会における築造例を中心に紹介、分析することで、別稿において既に考察した日本の最初期のルルドの聖洞窟模型群⁽¹⁾に後続する模型群がどのように展開したかを明らかにしたい。また併せて、ルルドの聖洞窟模型の類型化も試みたい。

考察に当たっては、まず1章で現在の日本のカトリック教会の教区、特に長崎大司教区の概要を述べた後、2章において稿者が行った調査、踏査方法について述べる。続いて3章では、概観の着目点について一言した後、調査や踏査結果に基づいて、各教会の聖洞窟模型の概要や造形上の特徴を概観する。そして最後に第4章でそれらの類型化も試みながら、ルルドの聖洞窟模型の発展ないしは展開について結論を述べる。

1. 現在の日本の司教区と長崎大司教区

現在の日本のカトリック教会は、東京教会管区、大阪教会管区、長崎教会管区の3管区に分かれており、各管区が複数の教区を統括している。すなわち、東京教会管区は東京大司教区、札幌司教区、仙台司教区、新潟司教区、さいたま司教区、横浜司教区の6司教区を統括し、大阪教会管区は大阪大司教区、名古屋教区、京都司教区、広島司教区、高松司教区の5司教区、次いで長崎教会管区は長崎大司教区、福岡司教区、大分司教区、鹿児島司教区、那覇司教区の5司教区を統括している。そして、各司教区がさらにそれぞれの多くの小教区を統括している。

以上の16司教区のうち、長崎大司教区は71の小教区を統括しており、その数は横浜司教区、大阪大司教区、東京大司教区に次いで多い。そしてそれら71の小教区は、さらに便宜上「長崎中地区」「長崎南地区」「長崎北地区」「佐世保地区」「平戸・北松浦地区」「上五島地区」「下五島地区」の7地区に分けて統括されている。3章では、これら7地区の区分に従って築造例を概観していく。

2. 長崎大司教区のルルドの聖洞窟模型群の調査

稿者は、諸文献の参照やホームページ検索によって聖洞窟模型の存在を確認できた教会を中心に、平成24年度以降、質問事項を列挙した調査票による調査（発送と回収

による情報収集)と、調査台帳を用いた現地踏査を行ってきた。しかし、回答がないか、回答があっても「不明」と書かれた項目が多く、詳細を明らかにできなかった例の方が多い。また、稿者が存在を認識できていない築造例が他にもあると思われ、リストアップ自体が不完全である可能性もある。しかし、たとえ若干の遺漏があっても、考察結果に大きな影響を与えるとは思われないため、現段階で得られた情報や判明事項を基に考察を進めていく。

各教会に送った調査票の調査事項は、1. ルルド (の洞窟)、ファティマ (の聖母)、十字架の道行きなどの有無、2. 名称 (例: ルルド (の洞窟)、ファティマ (の聖母)、十字架の道行き など)、3. 築造の発起人名もしくは団体名、4. 設計者・施工者・実際の作業名、5. 築造年、6. 建造物 (聖母マリア像等を含む) の構成、並びに素材、7. 聖母マリア像等の制作者もしくは製造 (業) 者名、8. 全体の築造費、並びに経費の負担者など、9. 築造場所、10. 教会自体の創設者・団体ならびに創設年、などである。また、踏査時に持参した台帳には、以上の項目の他、敷地内における洞窟模型の位置を図示する欄や碑文等の文字を記入できる欄も設けた。

なお、それらの調査結果と本稿で取り上げた聖洞窟模型の所在地を、それぞれ表1と図1に整理した。併せて参照されたい。

3. 長崎大司教区のルルドの聖洞窟模型群の築造例

続いて具体的な築造例を見ていくが、そ

れに先立って、各例の築造ないしは造形上の確認ポイントについて一言しておけば、それらは当然模造対象であるルルドの洞窟の諸特徴やベルナデットが語った出現時の聖処女の諸特徴、ないしは彫刻家 J. H. ファビッシュ (Joseph Hugues Fabisch, 1812~86) が制作して洞窟に設置した聖処女像との相似性ということになる。しかし、それらの特徴については、ルルドに関する多くの文献に述べられている上、既に稿者の別稿⁽²⁾でも考察、確認しているため、ここでは割愛することにする。また、ルルドの聖母像のみが単体で設置されているものは、ここでは対象としないことを断っておく。

3-1. 地区 I (長崎中地区)

①小峰 (本原) の聖洞窟模型

現在、一般に「小峰のルルド」と呼ばれている洞窟模型 (図2) は、多くの模型とは異なり、現在は住宅地の目立たない所に存在している。しかしこの周辺は、昔は金毘羅山の尾根伝いで、辺りは海であり、ルルドのある丘に網をあげて乾かしたため「網繰場」、ないしは「緑谷」と呼ばれていた。ここに同模型が築造された経緯は次の通りである。

かねてよりルルドの聖洞窟模型の築造を考えていた本原修道院のフランシスコ会修士ヨゼフ岩永は、ある日6cm位の陶器の聖母像を水の流れるところに置いて帰ったが、2年後も同じ場所にその像が倒れずに在ったことに驚いて、原爆で精神的・肉体的打撃を受けた人々の心の支えになるようにと、聖母の栄を祈念してそこに洞窟模型を造ることに決めた。そのことは、当時の

三原町野中（現在の小峰）の北西急傾斜地の下方の、昔から清水が湧き出て、逸話や伝承もある「最後（臨終）水」（地名）と呼ばれる場所で、ルルドにおけると同様に前方に大きくうねった川も流れていた。そして第三会員らの賛成を得て早速土地を購入し、ルルド造成の専門家浦川健一氏の指揮の下、本原三丁目から植木や花、石を運んで昭和28（1953）年に着工し、翌29（1954）年5月⁽³⁾に完成させたのが現在の小峰のルルドというわけである。設置されたマリア像は、当時のフランシスコ会修道院長 T. ラクロワ（Thelesphore Lacroix, ?～1973）が、カナダの恩人の援助で寄附したものであったが、同像は後に本原教会の聖洞窟模型内に移設された。

この模型には、洞窟は、祭壇の置かれた大きな窟と、白衣を纏い青い帯を垂らし、合掌して正面を向く彩色マリア像を配した小さな左上方の小窟、また、その下方の昭和29（1954）年の聖母年の記念であることを刻んだ上方が丸くなった小さな石碑を置いた小窟、さらにルルドにもある左端の洞窟の計四窟ある。また、祭壇のある中央の洞窟の左側からは、細い管を通して清水が常にその下の岩に流れ落ちるように工夫もされている。さらに彩色されたベルナデット像は、左側ではなく、右側に跪いて合掌しながらマリア像を仰ぎ見る恰好になっている。現在設置されている両像は、長崎の中田ザビエル工房で制作されたものである。なおここでは、“AVE”の文字をあしらった緩やかに弧を描く低い鉄柵が、聖域を画すかのように前方に設けられている。

②城山教会の聖洞窟模型

城山教会は、城山小教区が聖アウグスティノ修道会によって誕生した教区であるため、同会の活動と密接に関係している。同修道会は江戸幕府によるキリスト教弾圧によって撤退を余儀なくされたが、終戦後の昭和27（1952）年に、長崎教区から教育事業を行うよう要請を受け、城山のマリア会浦上聖マリア学院の跡地内の建物を聖堂と住居として翌年から再び活動を開始することになった。城山地区は浦上小教区に属していたが、昭和29（1954）年には城山小教区として独立し、翌昭和30（1955）年には待望の旧聖堂も完成した。現在の聖堂は平成12（2000）年に新築されたものである。

城山教会の洞窟模型は、聖母御出現100周年に当たる昭和33（1958）年に、G. クルパ神父（当時の助任司祭 George Krupa, 1952～60在任）の発案、並びに同神父の姉の援助金と信徒の労働奉仕によって築造が開始され、聖母被昇天の祝日である8月15日に完成されたものである。同模型は、聖マリア学院小学校校舎の下に低い山茶花生垣に囲まれた敷地内に土地の段差を利用して築造されているが、洞窟はなく、岩肌のみがセメントかモルタルでグロッタ状にごつごつと表現されている。そしてその岩肌の右上方に造られた突出部に、セメントかコンクリート製と思われる正面を向いて合掌する純白のマリア像が置かれ、左下方にやはりセメントかコンクリート製の跪く真白なベルナデット像がマリアを見上げる恰好で配されている。岩肌の前方の地面には自然石で囲った池が造られており、そこに水を流すための水道管も布設されている。また、池の正面向かって右寄りに祈禱者用

の石製の長椅子が2列に亘って設置されているが、祭壇はない。

③本原教会の聖洞窟模型

本原教会は、浦上小教区に属していた本原3丁目クラブを、昭和27（1952）年に山口司教が聖別し、聖パウロ三木に捧げて仮聖堂としたのに始まる。その後、予てより長崎で宣教活動をしていたフランシスコ会が、昭和34（1959）年に長崎修道院を本原の現在地に設立して、仮聖堂もこの地に移転してきたため、翌昭和35（1960）年に本原小教区が新設された際には、この聖フランシスコ会が同教区の司牧を委託されることになった。そして昭和37（1962）年、現在の聖堂が落成し、献堂・祝別されて現在に至っている。

本原教会の聖洞窟模型（図3）は、聖堂裏手の潜伏キリシタンが密かに集まり祈りを捧げた一本木山（マリアの山）と呼ばれる裏山に、昭和62（1987）年に築造された。かつてこの山の中には、迫害時代からB. T. プティジャン神父（Bernard-Thadée Petitjean, 1829-1884）の頃まで、この泉の水を使って洗礼を受けていた由緒ある清泉があったが、裏山の宅地開発によって枯れてしまい、現在は洞窟模型にも水は流れていない。窟は二つあり、大きな窟には十字架、小さな右上方の窟には青い帯を垂らし白い衣を纏って正面を向いて上方を見上げる美しいマリア像が置かれているが、これは、元小峰のルルドに置かれていたものを移設したものである。また、左下方には、跪いてマリアを見上げる白くて小さなベルナデット像が置かれている。

その他、この本原の地で特筆すべきこと

として、屋外に十字架の道行きが建造されていることが挙げられる。その14留の道行きは、マリアの山の下から始まり、ルルドの聖洞窟模型の脇の石段を上がり、頂きにある磔刑像へ至るように設置されている。

3-2. 地区Ⅱ（長崎南地区）

①本河内教会の聖洞窟模型

本河内教会は、昭和5（1930）年来日した聖M. M. コルベ師（Maksymilian Maria Kolbe, 1894-1941）が、翌6年に現在地に用地を求めて設立したコンベンツァル聖フランシスコ会聖母の騎士修道院（無原罪の園）とともに始まった。同地は、昭和29（1954）年に中町小教区より分離して本河内小教区として独立した。設立当初建立された初代の聖堂が老朽化したため、昭和39（1964）年には新聖堂も建設された。

この聖母の騎士修道院の敷地内に築造された聖洞窟模型（図4）は、来日する前にフランスのルルドを訪れていたコルベ神父が、本河内の修道院の裏山にルルドに似た洞窟を見つけ昭和7年に開設したものであるが、造成工事が完成したのは、コルベ神父が同地を去った後の昭和14（1939）年であった。本河内の模型は、オリジナルのルルドがそうであるように、山の崖をそのまま利用して築造されているが、ベルナデットが泉水を湧出させた大きな洞窟はなく、御出現の窟だけとなっている。そしてその右上方の窟に、白衣と青い帯を風になびかせ合掌して上方を見上げる、日本の工房作とは異なるコントラポストを意識した美しい彩色マリア像、左下方の比較的広い空間に同様に彩色された跪くベルナデット像

(中田ザビエル工房作) が置かれている。さらにマリア像の足元からは、ヴァティカンから公式に「奇跡の泉」と認定された清水が湧き出ている。因みに、昭和56(1981)年に来日した教皇ヨハネ・パウロ2世(1920~2005)も、同郷のコルベ神父ゆかりの本河内や洞窟模型を訪れ、3年後の昭和59(1984)年には同地をヴァティカンの公式巡礼地とし、この洞窟模型を訪れて祈りを捧げた者に全免償を与えてもいる。

また、教会堂から洞窟模型へ至るまでの約200メートルの参道には、ロザリオの玄義の道行きも設置されていることを付言しておく。

②(巡) 善長谷の聖洞窟模型

善長谷教会は、隠れキリシタンがこの地で秘かに信仰を守ってきたことを背景として、標高350メートルの城山に、明治28(1895)年に木造で創建されたが、その後昭和27(1952)年に再建され、修復を経ながら今に至る教会である。

善長谷の洞窟模型(図5)は、聖堂の右側から下方に向かう階段を下りていった所に築造されている。この洞窟模型の築造が開始されたのは、善長谷教会がまだ中町小教区の巡回教会であった昭和32(1957)年のことで、中町教会の古川重吉神父と信徒、特に信徒のなかでも造園業を営んでいた立山の田中氏を中心となって築造に当たり、その奉仕人数は延べ3,700人を数えた。一見、聖堂裏の自然な岩壁を巧みに利用しているかのように見えるが、数多くの岩を持ち込んで築造されたもので、完成は翌昭和33年の9月のことであった。本河内の洞窟模型とよく似たスケールの大きな模型で、

洞窟は、白衣を纏い青い帯を腰から垂らして合掌しながらやや上方を見上げる彩色マリア像を配する右上方の洞窟だけが、運ばれた石を積み上げて造られているだけで、その左下方に造るべき大きな洞窟は造られていない。しかし、ベルナデット像(彩色、中田ザビエル工房作)を設置できるくらいの空間は設けられており、さらにその左側に石で囲ってモルタルで固めた小さな手水鉢とその水を汲むための柄杓が置かれている。ベルナデットは跪き、合掌した両手にロザリオをかけてマリアを見上げている。ルルドにある祭壇やベンチも設置されている。

③(巡) 岳教会の聖洞窟模型

明治後半、外海地方の出津から移住してきた信徒たちは神ノ島教会に属していたが、昭和31(1956)年以降、巡回として飽ノ浦教会に属することになった。現在の聖堂は昭和45(1970)年に建てられたものである。

同教会の初代のルルドの聖洞窟模型は、教会までの山道の途中に昭和39(1964)年5月に築造され、信徒と考えられる久保辰一氏寄贈の純白のマリア像(中田ザビエル工房作)が置かれていたとされる⁽⁴⁾。しかし、平成3(1991)年の台風により、洞窟模型へ至る道が不通となったため、平成4(1992)年に岳教会敷地内の聖堂入口近くに2代目の洞窟模型が築造された。そして平成8年9月には旧洞窟模型のマリア像も港の見える新しい洞窟模型に移設された。教会敷地内の模型は大きな岩を積み重ねて造られているが、洞窟はなく、ほぼ中央に位置する大きな岩の上に、正面を向いて合掌する純白の美しいマリア像が露出した状

態で設置されている。そして向かって左側に、跪いて胸前で握りしめた両手に長いロザリオを掛けた彩色ベルナデット像が、マリアを見上げるように置かれている。祭壇はないが、マリア像の足元には、水盤状に円く削り貫いた後、手前に水が流れ出るように表面に小さな穴をあけた岩（手水鉢？）が置かれており、さらにその削り貫いた部分に水を供給できるよう細い水道管が布設されている。また、ベルナデット像の足元にも給水場が設けられている。

④神ノ島教会の聖洞窟模型

神ノ島は、現在は埋め立てられて陸続きになっているが、幕末期は長崎港に入る手前の直径1 kmほどの小島であり、鍋島藩の飛地領であったため、キリシタンが潜むには都合がよく、矢上や諫早、佐賀からキリシタンが同島に移り住んだ。一般住民も含め、彼ら移民を祖先とする神ノ島では、明治9（1876）年に早々に仮聖堂が建てられ、フランス人宣教師によって司牧が行われた。現在の聖堂は、明治30（1897）年にE. デュラン（Edouard Durand, 1856-1918）神父の設計によって建造されたもので、長崎市内の教会の中では国宝の大浦天主堂に次いで古く、建築史的にも重要なものである。当初は煉瓦造りであったが、戦後石造に見せるためにモルタル塗りが施された。

同教会ではルルドの聖洞窟模型（図6）は、信徒の希望で、同聖堂のファサードに向かって左側の山林の崖を利用して、昭和53（1978）年に築造された。単洞型で、窟内には、正面を向いて合掌する白い衣、青い帯の比較的大きな彩色マリア像（中田

ビエル工房作）が設置されている。急な階段を利用して接近せざるをえない急斜面に築造されていることもあり、祭壇や池、水の湧出設備は設けられていない。また、ベルナデット像も設置されていない。

⑤（巡）高島教会の聖洞窟模型

高島教会は、明治24（1891）年に信徒たちの拠金によって45坪の土地に伊王島の大工峰氏によって聖堂が建立されたことに始まる。高島の信徒の祖先は、宝暦年間に外海の檜山地区から迫害を逃れてきたキリシタンであったが、高島炭鉱の発展に伴って信徒数が増加し、昭和29（1954）年には新聖堂が建立された。また、昭和31年には大浦小教区から独立して高島小教区が設立された。

高島のルルドの洞窟模型（図7）は、教会の敷地の入口から見て左側に、小高い隣接地との土地の段差を利用して築造されている。模型正面向かって左側に置かれている表側に「ルルドの聖母」と書かれた石碑の裏側の刻銘によれば、昭和53（1978）年3月25日に竣工されたものであり、築造者は信徒の「一級造園士ミカエル田中秀幸」、御像の製作者は「ドミニコ中田秀和」、すなわち多くの教会堂やルルドの聖洞窟模型に御像を納めている中田工房によって製作されたものであったことが分かる。また、奉献は「主任司祭ヨゼフ紙崎忠男、信徒一同」と刻まれているため、司祭と信徒が力を合わせて築造したものであることも分かる。比較的小振りな石を積み重ねて造った洞窟は大小二つあり、上方の小さい方の洞窟には、白衣と青い帯を身に着け合掌してやや下方を向く彩色マリア像、右下方の石

積みの上には跪いて胸前で両手を交差させた彩色ベルナデット像（中田ザビエル工房作）が配されている。大きい方の洞窟内には、水は張られていないものの、大石を刳り貫いた水槽が造られている他、ベルナデット像の下方にも、水を貯めることができる小さな石積みの手水鉢が造られている。しかし、それらに水を送る水道管は見出せず、祭壇も存在していない。

3-3. 地区Ⅲ（長崎北地区）

①島原教会の聖洞窟模型

島原教会は、昭和7（1932）年に諫早小教区より分離したことに始まる。当初は教区司祭によって司牧されていたが、その後アメリカ、オーストラリア、カナダの司祭による司牧を経て、昭和45（1970）年から再び教区司祭の司牧地域となった。現在の聖堂は平成9（1997）年に献堂されたものである。

同教会の聖洞窟模型は、聖堂正面向かって左側の塀の傍に築造されている。洞窟はなく、大きな高さのある石と平たく低い石が置かれ、丈のある石の上に白い衣を纏い青い帯を前方に垂らして上方を見上げる彩色マリア像が置かれ、左方の平たい石の上に、跪いて合掌しながらマリアを見上げる彩色ベルナデット像が置かれている。その他、この模型が特異なのは、フランスのルルドの洞窟の前を流れるガヴ川に見立てた池が造られ、しかもその池の淵石に、島原半島の殉教地やセミナリヨ発祥の地から運んできた石が用いられている点である。そして運ばれてきた石には、それぞれ採取した場所が分かるように「小濱1616」や「有

家1614」、「加津佐1590」、「有馬セミナリヨ1580」、「雲仙1689」、「島原 有明海1627 2 21」「深江」、「八良尾」といった文字が陰刻されている。祭壇はないが、植樹されてそこだけ清涼な空気が漂っているような雰囲気が作り出されている。同模型の築造年代は、島原教会への照会によれば、新聖堂の建設とほぼ同時期とされる。

②小長井教会の聖洞窟模型

小長井教会は、昭和28（1953）年に佐賀県との境界にコンベンツァル聖フランシスコ修道会小長井修道院が設立されるに伴い、養護施設「聖母の騎士園」が大村から同地に移設されたため、その職員や園児を対象に建設された。

同地の洞窟模型（図8）は、この修道院の広大な敷地内の山林で平成6（1994）年に築造が開始され、約500万円の費用と約5年の歳月をかけて完成されたものである。築造者は同修道院で、作業に当たったのは濱口広衛修道士と田川勇一氏、田川義孝氏（職員で信徒？）であった。同地の洞窟模型は、稿者がかつて目にした多くの模型の中で最もスケールが大きいもので、山の斜面全体を築造対象としていると言っても過言ではない。しかし、ここでも洞窟は、マリアが出現した小さい方の洞窟だけが大きな石を組み合わせで比較的大きく造られているだけで、ベルナデットが水を掘り出した大きな洞窟の方は造られていない。そして、湧き出た奇跡の水を表していると思われる小さな池と、祭壇に当たると思われる大きな1枚岩が、両像のかなり下方の平坦な地面に設置されている。いずれにしても、築山の壮大さと、風になびく白衣と青い帯

を身に着けて合掌しながら上方を見上げる美しいイタリア製の彩色マリア像、並びに跪いて合掌しながらマリアを見上げる目鼻立ちがはっきりしたベルナデット像（中田ザビエル工房作）の美しさが印象的な洞窟模型と言える。

3-4. 地区Ⅳ（佐世保地区）

①三浦町教会の洞窟模型

三浦町教会は、まず明治30（1897）年に J. C. コンパス司教（Jean Claude Combaz, 1856-1926）によって設立された小教区に、片岡相栄神父が建設した天主堂を前身としている。現教会堂は、脇田浅五郎師（のち横浜教区長）の尽力によって建設されたもので、昭和6（1931）年に祝別されている。

三浦町の聖洞窟模型（図9）は、教会堂の正面向かって右側の庭に昭和43（1968）年に築造されたものであるが、築造の詳細は不詳である。しかし、山の斜面や崖を利用したものではなく、大きな石材を縦に組み合わせて築造された単洞型の模型であることは明らかである。そして合掌して正面を向き、白い衣を纏って青い帯を前方に垂らした青い眼の彩色マリア像が洞窟内に配され、その左下方に跪いて合掌しながらマリアを見上げる彩色ベルナデット像が配されている。いずれも中田ザビエル工房作である。両像の近くには清水の湧出に擬した装置は造られていないが、模型から少し離れた右方に、石を割り貫いて水を貯められるようにした小さな手水鉢が造られている。しかし、祭壇はない。

②樺崎教会の聖洞窟模型

樺崎教会は、島原の乱に敗れて五島に逃

れた信徒がキリシタン弾圧をさらに逃れて同地に住みつき、浜辺にもった民家風の聖堂を前身としている。やがて昭和42（1967）年に下神崎小教区から分離されて小教区となり、同時に高台に現聖堂が建立された。

同教会では、司祭館の裏に下方へ下る階段があり、その階段を下りると、下方の信徒会館付近から始まる十字架の道行きのルートに合流できるようになっている。その十字架の道行きは、最終的に、教会堂がある高台に隣接する別の高台（十字架山）に設置された小聖堂内に配された十字架の磔刑像を終着点として設置されている。ルルドの聖洞窟模型は、その小聖堂の正面向かって左隣りに角張った形の石を用いて築造され、昭和61（1986）年に十字架山とともに祝別されたものである。洞窟は一つしかなく、その上部をヒバと思われる常緑の樹木が屋根のように覆っている。そしてそこに白い衣と青い帯を身に着け、正面を向いて合掌している青い目の比較的大きなマリア像が設置されている。祭壇はないが、岩場をよく観察すると、左側下方の石積み背後に水道管と蛇口があり、岩の間からは細いプラスチック製の管が前方に突き出ていることが分かる。いずれにしても、カルヴァリオと隣接する洞窟模型としてユニークな例と言える。

③旧神崎教会の聖洞窟模型

昭和5（1930）年に日本最古の鉄筋コンクリート造りによるゴシック様式の聖堂が九十九島の海岸沿いに落成され、同年6月には下神崎小教区も設立された。その後同聖堂は昭和55（1980）年に大改修され、す

すべての窓にステンドグラスが嵌め込まれたが、平成2（1990）年頃より各所が傷み始め、旧教会堂とは別の場所に新聖堂を建設することが決定された。旧聖堂については文化財としての保存も検討されたが⁽⁵⁾、平成16（2004）年に新聖堂が小高い丘の上に完成されると、最終的に取り壊されるに至った。

同教会ではルルドの聖洞窟模型（図10）は、旧聖堂の裏山の純心聖母会神崎修道院脇の坂道の下に、丸みを帯びた大きな石を積み上げて昭和63（1988）年に築造された。模型の左側の石碑に刻まれた碑文には、

「…前略…教皇ヨハネ・パウロ二世が二十一世紀の教会の準備のために制定した特別聖母年を機に計画されその終了年の降誕祭に完成された。

未洗者である町の名士の方々 純心聖母会 他小教区の信徒の方々のご芳志と藤山石産建設会社代表取締役社長の犠牲的奉仕を始め 小教区内においては 司祭及び経済評議員各位の配慮と努力に呼応した信徒の信仰に基づく協力による 専ら善意の人々の自由で寛大な寄附によって建設された事を感謝と慶びのうちにここに未長く記念する…後略…」

とあり、同模型が未洗者を含む多くの人々の奉仕と努力、寄附によって完成されたものであることが分かる。この模型には洞窟が大小二つあり、大きい方の上方の窟に白衣を纏い青い帯を前方に垂らし、合掌してやや下方に眼差しを向けた中田ザビエル工房作の彩色マリア像が、そして正面向かって左下方の小窟に跪いて合掌する彩色ベル

ナデット像が置かれている。洞窟の下方に造られている池の水は枯れていたが、水を流すためのプラスチック製の管が池に伸びているほか、小窟の下方にも水を流すための管が埋め込まれている。さらに洞窟前に扇状に整然と敷き詰められた切石の上には、石製の十字架の載る祭壇も置かれている。

④浅子教会の聖洞窟模型

明治17（1884）年頃土地を求めて移住した黒島の信徒は、梶の浦の民家で平戸の紐差の宣教師に巡回司牧されていたが、明治25（1892）年には同地に現在の木造の小さな教会堂が建立された。当初は下神崎小教区に属していたが、昭和18（1943）年の相浦小教区への編入を経て、昭和28（1953）年に分離、独立した。

同教会ではルルドの洞窟模型（図11）は、2か所ある入口のうち、信徒会館のある左側の入口近くの隣家との境をなす低い壁に沿って築造されている。設置されている石碑によれば、同模型は献堂75周年と小教区独立50周年を記念して、平成15（2003）年に楠本雪男氏が築造したものである。洞窟は一つで、その中に正面を向いて合掌し、白い衣と青い帯をしめた彩色マリア像が配され、その左下方の石の上に、やはり彩色ベルナデット像が跪いて合掌しながらマリアを見上げるように配されている。両像とも中田ザビエル工房作である。洞窟の前方の地面はまるで池のように比較的大きな岩で囲われ、地面はタイル張りされている。そしてその中央には、内部を刳り貫いた小さな丸い石（手水鉢）が置かれ、その穴に水が張られている。さらに右方には、石を積んで隙間をモルタルで充填した小さな別

の囲いが造られ、蛇口から出る水が外に流れ出さないよう工夫されている。しかし、祭壇は設置されていない。

同教会の敷地内には、さらにもう一つの小さな洞窟模型が設置されている。それは信徒会館の低い裏山の岩肌を利用して造られたもので、下方に造られている池には太鼓橋が架かり鯉も泳いでいる。そしてモルタルで補強した岩肌を開けた小さな窟内に、まるでミニチュアのような無彩色のマリア像を、また左下方の突き出た石の上にさらに小さいベルナデット像を設置している。豊かな水が道管を通して池に流れ込んでいるこの慎ましい小さな模型は、今から20年くらい前に司祭館が建設された際、当時の神父によって設置されたとされる。

3-5. 地区V（平戸・北松浦地区）

①宝亀教会の聖洞窟模型

宝亀教会は、明治18（1885）年に18戸の信徒によって京崎地区に最初の仮聖堂が建設されたことに始まる。明治31（1898）年には現在の宝亀教会が建設され、翌32（1899）年に紐差教会から分離・独立して、山野、中野の両教会を含めて宝亀小教区として発足するに至った。

同教会の聖洞窟模型（図12）は、敷地の入口の右側の門柱横に築造されている。模型の右下方に置かれた石の刻銘から、改築落成と献堂90周年を記念して昭和63（1988）年2月11日に完成されたことが分かるが、築造者等の詳細は不詳である。この小さな模型は、石を積んだ洞窟が一つだけの単洞型で、窟内に白衣を纏い青い帯を前方に垂らし、正面を向いて合掌する青い

眼の美しいマリア像のみが置かれている。祭壇や水の湧出設備はないが、蘭やギボウシ等の観葉植物で美しく飾られている。

②田平教会の洞窟模型

続いて田平教会は、外国宣教会のE. ラゲ神父（Émile Ragugt, 1854-1929）とM. M. ド・ロ神父（Marc Marie de Rotz, 1840-1914）らが私費で荒れ地を購入した所に、明治19（1886）年以降、神父らの勧めによって黒島と出津（外海）から移住して来た信徒たちが最初は民家を仮聖堂として基礎を築き始めたことに始まる教会である。その後、信徒の積立金や募金、フランス人篤志家の大口寄付と信徒の献身的な労働奉仕によって本格的な教会の建設が計画され、大正7（1918）年に念願の教会が実現された。設計・施工に当たったのは、異色の棟梁建築家として有名な鉄川与助であった。同堂は、周知のように、現在国の重要文化財に指定されている。

この平戸瀬戸を望む教会の敷地内には、現在二つのルルドの聖母像が存在している。一つは昭和56（1981）年に、教会堂の前庭の台座の上に正面を向いて合掌している白い衣と青い帯を身に着けた比較的大きな彩色マリア像（中田ザビエル工房作）のみを設置したもので、台座に「ルルドの聖母」と文字が刻まれているだけで、石組みによる洞窟の築造等は一切なされていない。従って本稿では考察の対象外となる。もう一つは（図13）、平成2（1990）年に築造されたもので、敷地の正面に当たる門柱の階段下に見出される。大きな石を組んで造られた洞窟模型であるが、窟はやはり一つしかない。そしてそこに、彩色されてはい

るが金色の装飾だけが施された白い衣と白い帯を身に着け、合掌しながら下方を見下ろす美しい小型の彩色マリア像が設置され、その左下方に小さな白いベルナデット像が跪いて指を組み合わせた両手にロザリオを掛けてマリアを見上げる形で設置されている。この小型の模型には、敷地が狹隘であることも関係していようが、祭壇や水の湧出装置は設けられていない。

なお、『田平カトリック教会創立100周年』⁽⁵⁾の年表には、以上の二つの聖母像に先行するルルドの聖母像が、昭和33（1958）年に教会正門に建立されたとあることを付言しておく。

③平戸ザビエル記念教会の聖洞窟模型

平戸教会は、以前は上神崎教会の巡回地であったが、昭和6（1931）年の新聖堂の落成・献堂とともに教会として設立された。昭和46（1971）年には聖堂前側面にザビエル像が建立された。平戸は、現在、商工や行政、教育、交通などあらゆる面において県北の中心であるため、同教会は平戸、松浦、北松浦地区の主管教会となっている。

平戸ザビエル記念教会のルルドの聖洞窟模型（図14）は、模型の右側に設置されている解説板によれば、平成18（2006）年に、献堂75周年とザビエル生誕500周年を記念して、「人々を信仰へ招き、信徒の信仰を養う場、そして聖母マリアに対する信心から……」築造されたものである。模型は、自然の山の斜面や崖を利用したものではなく、聖堂正面入口へ向かう階段の右側に石を積み上げて造られたもので、大小二つの洞窟を備えている。そして上方の小窟内に、中田ザビエル工房製の白衣と青い帯を身に

着けた正面向きの合掌する彩色マリア像、マリアの右下方の石積みの上に跪いて合掌するベルナデット像が置かれている。また、大きな洞窟のやや前方に石製の祭壇が置かれ、祭壇の左方には燭台も設置されている。また、槇と思われる樹木が左右に一本ずつ植えられ、薔薇の代わりに岩場からは蘭も生え出ている。泉の湧出装置や手水鉢等は設置されておらず、洞窟模型の前方には鉄柵が設けられている。

3-6. 地区Ⅵ（上五島地区）

①鯛ノ浦の聖洞窟模型

上五島の鯛ノ浦教会は、外海の出津から移住してきたキリシタンの子孫に始まる集落に建てられた教会である。明治13（1880）年にパリ外国宣教会 A. F. ブレル師（Auguste-Florentin Bourelle, 1847-1885）が赴任したことで上五島の布教の中心的存在となっていく。明治14（1881）年に信徒が待ち望んだ天主堂が建立されたが、それは明治36（1903）年に木造瓦葺きの聖堂に建て替えられた。しかし、この2代目の聖堂も潮風のために破損が著しく、昭和54（1979）年に現在の聖堂が新たに建てられたが、2代目の聖堂は現在も図書館として利用されている。

この鯛ノ浦では、旧教会堂の裏側の広い敷地に、自分たちのルルド参詣地をもちたいとの願いから、昭和38（1963）年、信徒であり彫刻家、画家でもあった中田秀和の発案、浜口健一神父の提案により、規模の大きなルルドの洞窟模型（図15）が築造された。洞窟はおそらく自然の山の岩を穿って作ったもので、右上方と左下方に一つづ

つ設けられている。そして上方の窟に中田自身が制作した白い衣と青い帯を身に着けた合掌する正面向きの非常に美しい彩色マリア像が置かれ、跪いて合掌する彩色ベルナデット像の方は、左下方からではなく、右側からマリアを見上げるように台座上に設置された。“JE SUIS L'IMMACULEE CONCEPTION”（私は無原罪の御宿りである）というアルファベットが、足元ではなく、頭部に光輪としてあしらわれている点がこのマリア像の特徴となっている。また、左下方の大きな洞のなかには、ルルドに置かれているのと同じような祭壇と燭台が置かれている。さらにマリアの足元からは水も湧出して岩を伝って下方に流れているが、洞窟模型の前方に鉄柵が設けられていて信徒が直接その水に与れないためか、鉄柵の手前に手水鉢を置く石製の台と柄杓が置かれている。鯛ノ浦の模型は、フランスのルルドの洞窟や日本における最初の洞窟模型である井持浦のルルドに大きさや特徴を似せようという意図や努力が読み取れる築造例と言える。

②（巡）中ノ浦教会の聖洞窟模型

桐教会の巡回教会である中ノ浦教会の基礎は、寛永年間に外海地方から移住した信徒の子孫によって築かれ、大正14（1925）年、木造の聖堂が建立された。昭和41（1966）年には入口が増築され、同時に単塔も建てられた。昭和45（1970）年には司祭と公民館も建設された。

中ノ浦教会のルルドの洞窟模型（図16）は、ファサードに向かって左の山林側の麓に昭和48（1973）年に造られたものである。下方に辛うじて見える石は極めて大きいため、大きな石を積み重ねて造っていると思

われるが、蔦と蔓薔薇がびっしり岩を覆っているため全体の構造は捉えにくい。いずれにしても単洞型であり、多くの例と同様に、窟内に正面を向いて合掌する白衣を纏い青い帯を前方に垂らした中田ザビエル工房作の彩色マリア像（寄贈）を置いている。しかし、祭壇や清水の湧出装置、手水鉢のようなものは設けられていない。

③曾根教会の聖洞窟模型

曾根も五島崩れの迫害を受けたが、明治14（1881）年に教会が創立された。次いで明治34年頃 A. C. A. ペルー神父（Albert-Charles-Arsène Pelu, 1848～1918）によって旧聖堂が建設されたが、この時には鉄川与助も参加していた。現聖堂は昭和41（1966）年建設のコンクリート造りである。昭和44（1969）年には、曾根教区が大浦教区とともに青砂ヶ浦小教区から分離・独立して創設された。その2年後の昭和46年には、仲知小教区から大水地区と小瀬良地区が同地区に編入されて今日に至っている。

同教会の聖洞窟模型（図17）は、聖堂正面向かって右側の聖堂よりかなり下方の土地に、小高く盛り上がった山林の高さを利用して、大きな石を垂直に積み重ねるようにして造られている。この模型は、返送頂いた調書の回答によれば、昭和49（1974）年に、主任司祭村中司師の指導、信徒である濱田組の協力によって、現地や近隣の石を採取して築造されたものである。洞窟は二つあるが、ここでは例外的に下方の洞窟の方が小さい。そして大きい方の右上方の窟内に、白い衣と青い帯を身に着け正面を向いて合掌する美しい彩色マリア像（中田ザビエル工房作）のみが配されている。下方

の小さな洞窟の上部には「ルルドの聖母」の文字が刻まれ、洞窟内の床には、おそらく水を貯めるためにコンクリートで四角形の窪みが造られており、その四角形の中央からさらに一つの石が突出するように置かれている。しかし、湧出の工夫がどのようになされているかは判然としなかった。祭壇は見出されなかったが、二重の鉄柵の間には、まるでルルドにおけるように祈祷用のベンチが置かれている。

④（巡）米山教会の聖洞窟模型

米山の信徒は、外海地方から小舟で迫害を逃れてきた篤い信仰をもつキリシタンを祖先としている。明治36（1903）年に信徒の希望で聖堂が建設されたが、老朽化が著しく、昭和52（1977）年に現在の聖堂が建立された。

同教会の慎ましい聖洞窟模型（図18）は、教会堂の右側を走る坂道との段差を利用して、教会堂裏の右隅に石を積んで築造されたものである。模型の左に設置された石碑には、「そのお方は何度もくり返して、罪人のために祈らなければならぬとおっしゃいました」とベルナデットの手紙の一部が刻まれ、その下に平成元（1989）年12月8日と記されていることから、元号が平成になったばかりの時に築造されたものであることが分かる。さらに年記の下には、「寄贈建立」として、「アレキジオ 白浜満」、「左官 アントニオ 長山七〇」、「協力 米山教会信徒一同」と刻まれているため、寄贈建立したのが一人の信徒であり、築造には左官であった信徒やその他の信徒が協力したことが分かる。洞窟は単洞型であり、窟内の“NOTRE DAME DE

LOURDES”の伝話を刻んだ石の上に、白い衣と青い帯を身に着け、正面を向いて合掌する彩色マリア像のみを設置している。同所には祭壇はないが、マリア像の右下方に石を組んで手水鉢が造られており、上方には蛇口も付けられて水を貯めることができるようになっている。また、石積みの間には小さな松も植えられている。

⑤（巡）猪ノ浦教会の聖洞窟模型

昭和22（1947）年に設立されたが、昭和26（1951）年に大曾小教区が設立されると、同教区の巡回教会となった。しかし、昭和50（1975）年真手の裏小教区が設立されると、今度は真手の浦小教区に編入された。初代の聖堂は大正初期に建立されたものであったが、老朽化のため、平成元（1989）年に新聖堂が建立された。

同教会の敷地内の聖洞窟模型は、その聖堂建て替え時に、当時の主任司祭であった小瀬良明神父が聖堂脇の岩谷への築造を提案したことに始まる。そして近くの河原から石が採集され、真手ノ浦からの応援も受けながら築造され、平成元（1989）年1月の聖堂献堂の日に祝別された。なお、マリア像は大曾教会主任の浜口松雄神父から寄贈されたものである。この洞窟模型については、まだ実見できていないが、ホームページに付された画像を確認する限り、単洞型のシンプルな構造であることが分かる。また、寄贈された無彩色の真白な正面向きの合掌するマリア像が、「1989年1月16日建立」と書かれた台石の上に置かれているだけで、ベルナデット像も、祭壇や泉水湧出等の装置も置かれていないことが確認できる。

⑥（巡）頭ヶ島の聖洞窟模型

頭ヶ島教会は、幕末まで無人島であった島に、安政6（1859）年、鯛ノ浦のキリシタンが迫害を逃れて住み着き、明治3（1870）年にドミンゴ松次郎が長崎でプチジャン神父の教えを受けて島に戻り、自宅を青年伝道師養成所として仮聖堂を置いたことに始まる。明治20（1887）年に最初の教会堂が建設されたが、現在の聖堂は、明治43（1910）年に大崎八重神父が、長崎から招いた石工や大工鉄川与助の指導を得て、松次郎の屋敷跡に、島で産出する石材を用いたロマネスク様式の聖堂の建設に着手し、7年余の歳月をかけて完成させたものである。この聖堂も周知のように国の重要文化財に指定されている。

この頭ヶ島にも、教会堂の裏側の石垣の一角に、白衣と青い帯を身に着け合掌して上方を見上げる美しいルルドの彩色聖母像が設置されている。多くの日本のルルドの聖母像と違って、本像は、コントラポストを強調した幾分動性のあるポーズをとった外国製である。しかし、築山風には築造されておらず、石垣のなかにアーチ状の壁龕を造り、その中に御像を設置しただけの簡素な造りになっている。龕の内側は、モルタルのような材料でグロッタ状に仕上げられているが、それ以外にはルルドの洞窟を偲ばせる特徴は何も見出されない。御像の下方の石垣の壁面には、「ルルドの聖母」ではなく「島の聖母」と刻まれている。鯛ノ浦教会への建造年代についての照会によれば、熊谷守一神父在任期の昭和56（1981）年から昭和63（1988）年）までの間に建造されたものである。

3-7. 地区Ⅶ（下五島地区）

①井持浦教会の聖洞窟模型

当時長崎教区に属していた下五島玉之浦の旧井持浦聖堂は、明治28（1895）年にペルー神父の設計で建設され、敷地内の聖洞窟模型に安置されたルルドの聖母に献堂された。しかし、同聖堂は昭和62年の台風によって倒壊したため、翌年、現在の鉄筋コンクリート造り煉瓦タイル張りの聖堂が新築された。

この井持浦教会の敷地内に築造された洞窟模型（図19）は、ローマのヴァチカン宮殿の庭にルルドの洞窟模型が造られたことを伝え聞いて、ペルー神父が築造した日本最古の模型である。玉之浦のような辺鄙な場所にルルドが造られたのは、一つには、明治28（1895）年に最初の木造の聖堂を建設しようとして地開きをした際に清水が湧き出て、それが当時のフランスにおけるルルド信心と合致していたためであり、いま一つには、信徒たちが、全五島から船を仕立てて参詣者がやってくるような巡礼地を井持浦にもちたいと願ったためであった。ペルー神父は築造場所を聖堂の脇に定め、着工に際しては全五島の信徒に協力を呼びかけて五島の津々浦々から小舟で材料の美石や奇岩を運ばせ、それらを信徒の代表たちの奉仕によって積み上げさせた。洞窟の設計には、海外旅行のまれな時代にフランスのルルド参りを実現した五島の住人の意向が反映されているとされる。さらに、洞窟には故国フランスから贈られた鉄製のルルドの聖母像が収められ、洞窟右横の泉水にはルルドの奇跡の泉から取寄せた霊水も注がれて、明治32（1899）年には完成した。

この井持浦教会の聖洞窟模型は今も敷地内に現存しており、その形状は御出現があった小窟と聖水が湧き出た洞窟を再現しようとしていたことを窺わせてくれる。しかし、規模はオリジナルより小さく、マッサビエルの洞窟同様ベルナデット像は置かれておらず、合掌して上方を見上げる、白衣と青い帯を身に着けた彩色のマリアの御像だけが小窟に置かれている。ルルドでは大窟に置かれている祭壇は、ここではかなり手前の、鉄柵と研磨された床石でできた祈祷空間内に石製のベンチとともに置かれている。さらに右方のルルドの聖水を注ぎ込んだとされる水場には、「ルルドの聖水の始まり」と題された銅板が岩に嵌め込まれ、清水の由来を説くとともに、備え付けられた二つの蛇口からは、常に水が供給されるようになっている。

②水ノ浦教会の聖洞窟模型

水ノ浦は、移住第一陣として外海の神浦の五つの姓の家族に当てがわれた地で、明治元年には五島崩れも経験した。しかし迫害にも怯まず、明治13（1880）年にはパリ外国宣教会士によって初代の聖堂も建てられ、明治35（1902）年には水ノ浦小教区として堂崎小教区から独立した。現在の白亜の聖堂は、昭和13（1938）年に、棟梁建築家鉄川与助の設計施工によって建設されたものである。

同教会の愛らしい洞窟模型（図20）は、聖堂ファサード向かって左側に築造されている。同模型は、昭和30（1955）年に、自分たちにも聖母に対する祈りの場が欲しいとの信徒の願いを受け、当時の司祭であった浜崎渡師が指導して、水ノ浦湾入口の魚

津ヶ崎の磯の穴の開いた石を積み上げて築造されたものである。洞窟が一つの単洞型であるが、マリア像だけでなくベルナデット像も置かれている。マリア像は、多くの例に洩れず、白い衣と青い帯を身に着け、合掌してやや下方を見下ろす彩色像であり、ベルナデット像も跪いて合掌する定型の彩色像となっている。祭壇はないが、模型の前方は半円形の石製の床となっており、その床を半円形の鉄柵が囲んでいる。また、マリアの足元近くには、上面を半球状に抉って綺麗に研磨した四角く黒い石が置かれているため、その半球状の窪みに清水が注がれるものと思われる。鉄柵の左側のやや離れた所には水道の蛇口もある。

なお、同教会の敷地にはお告げのマリア修道会が隣接しているとともに、聖堂の左側に広がる小高い山には、山の起伏を利用して十字架山が建造されており、一種のサクロ・モンテの感を呈している。

③三井楽教会の聖洞窟模型

次いで長崎教区最後の三井楽教会であるが、この教会は、寛政9（1797）年に大村藩から迫害を避けて逃れてきた隠れキリシタンの流れを汲む信徒が、明治13（1880）年にゴシック様式の木造聖堂を完成させたのに始まる。明治32（1899）年に下五島地区に最初の邦人司祭が着任すると同時に小教区となった。現在の聖堂は昭和46（1971）年に建立されたもので、島内各地から採集した貝殻のモザイク聖画によって壁面が飾られている。

三井楽教会の現在の聖洞窟模型は、昭和47（1972）年に、聖母マリアへの信心を深める目的で築造されたものである。しかし、

年代は不詳であるものの、それに先行する小さなルルドが存在していたとされる⁽⁶⁾。現在の模型も、地元のものと思われる穴の開いた奇岩を用いた控え目なものである。窟の数は一つで、そこに合掌してやや上を向く、白い衣と青い帯を身に着けた彩色の小マリア像が置かれ、左下方に跪いて胸前で手を交差させながらマリアを仰ぎ見るさらに小さな彩色されたベルナデット像が置かれているだけで、祭壇や泉水の湧出等は見られない。

④浜脇教会の聖洞窟模型

最初の天主堂は明治14（1881）年に建立されたものであったが、潮風に晒されて傷んだため、昭和28（1953）年に五島で最初の鉄筋コンクリート造りで新聖堂が建立された。解体された旧聖堂は五輪地区に移されて巡回教会（旧五輪教会）として使用されていたが、昭和60（1985）年に隣接地に新聖堂が建設されたため、福江市に寄贈されて保存公開されている。なお、この旧五輪聖堂は平成11（1999）年に国の重要文化財に指定された。

浜脇教会のルルドの聖洞窟模型については、いまだ踏査できていないが、井持浦の聖洞窟模型のような聖母への祈りの場が欲しいとの願いによって、年代は詳らかでないものの、旧司祭館の後ろに最初の模型が築造されたとされる。しかし、昭和50（1975）年頃、現在の聖堂裏に移転された⁽⁷⁾。ホームページ等で紹介されている画像で確認する限り、移転後の洞窟模型は、聖堂裏の山肌を利用して数多くの岩を積み上げて造られていることが分かる。洞窟は2ヶ所あり、右上方に合掌して正面を向く

白い衣と青い帯を身に着けた彩色マリア像（中田ザビエル工房作）が置かれている。しかし、ベルナデット像は設置されていないし、祭壇もない。また、かつては清水の湧出の工夫がなされていたようであるが、現在は水の湧出はなく、手水鉢等も置かれていない。

⑤福江教会の洞窟模型

続いて下五島の福江教会に移るが、同教会は、明治以降、旧福江城下に五島各地から信徒が集まるようになったため、大正3（1914）年に旧堂崎小教区から分離・独立した際に設立された教会である。現在の聖堂は、昭和37（1962）年4月に建立されたもので、同年に起こった福江の大火の際にも、この聖堂だけは奇跡的に焼失を免れたとされる。

この教会の敷地内にもルルドの洞窟模型が2度築造された。初代の模型は、昭和38（1963）年に、前年に起こった福江の大火を免れたことに対する感謝のしるしとして、松下佐吉神父と当時の経済評議員によって正門の左脇に築造されたものであった。しかし、それが老朽化したことと、車社会のニーズに応える必要が出て来たことから、昭和51（1976）年に、岩永薫神父によって聖堂入口の左脇に2代目の模型が築造されるに至った。この洞窟模型（図21）は、ルルドのオリジナル同様、二つの窟をもっているが、合掌してやや下方を見つめる白い衣と青い帯を身に着けた彩色マリア像が大きかったためか、右上の窟は他の築造例に比べ大きめに造られている。ベルナデット像は配されておらず、祭壇も泉水の湧出も見られないが、この洞窟模型の特筆すべき

特徴は、模型の前庭の扇形の床面を星形とそれを両側から挟むような二つの地図によって舗床している点にある。二つの地図のうち、左側は西欧、右側は五島列島を表している。そしてそれぞれの地図には、ルルドとヴァティカン、井持浦と福江の位置、すなわちルルド自体と、重要なルルドの洞窟模型がある位置が示されているのである。このような意匠は、稿者がこれまでに見た他の洞窟模型には見られないもので、福江オリジナルの独創的な意匠と言える。

⑥ 奈留教会の聖洞窟模型

かくれキリシタンの多い奈留島の中心地である葛島では、明治初期から家屋風の御堂が存在し、明治32年には聖堂もできていた。続いて、大正15年に奈留島の中心地の相ノ浦に聖堂が建てられ、かくれの人々への布教が勧められていたが、相次ぐ台風被害のため、昭和36（1961）年に現在のコンクリート造りの聖堂が建立された。

同教会のルルドの聖洞窟模型についても、未だ実見できていないが、同模型は、献堂30周年記念事業として当時の主任司祭によって教会の中庭への築造が企画され、長崎の田中造園によって平成元（1989）年に完成されたものである。平坦な庭に石を積み上げて造ったもので、比較的大きな窟が2ヶ所造られている。そして右上方に、俯き加減に正面を向いて合掌する白い衣と青い帯を身に着けた彩色マリア像が置かれ、大きな窟の近くに跪いて合掌しながらマリアを見上げる彩色ベルナデット像が置かれている。いずれも中田ザビエル工房作である。また、洞窟前方の空間に祭壇状の大きな石が置かれ、ベンチ代わりのような石も

設置されている。さらに、大きな窟の内部は池のようになっており、水も張られている。

4. ルルドの聖洞窟模型の類型

以上の概観の結果、長崎大司教区にはさまざまなタイプの洞窟模型が築造されていたことが分かったが、これらの類型化、あるいは分類は果たして可能であろうか。

ルルドの聖洞窟模型のさまざまな型を列挙する形で分類を試みた先行研究者は、管見の限り、加藤久雄氏ただ一人である。同氏は、カトリック長崎大司教区監修の『ザビエルと歩く ながさき巡礼』中の「長崎のルルド巡礼」と題した寄稿文の中⁽⁸⁾で、聖洞窟模型を、

- ① 水が出るタイプ／出ないタイプ
- ② 祭壇等の施設があるタイプ／ないタイプ
- ③ 右上の小さな洞穴（聖母像設置）と左下の大きな洞穴（水が湧き出る）が並存するタイプ／右上の小さな洞穴のみのタイプ
- ④ 祈祷のベルナデット像があるタイプ／ないタイプ
- ⑤ 背後が崖のタイプ／オープン・スペースにあるタイプ
- ⑥ その他

に分類している。そして、①については、湧き出す水まで再現する模型は少ないとし、②については、多くの場合はフランスのルルドのような祭壇等の設備はないとしている。また③については、フランスのオリジナルのように大小二つの洞窟を備えたタイプのものが多く、④については、さらにベ

ルナデットの位置が右側のタイプと左側のタイプ、ロザリオを手にして祈るタイプと合掌して祈るタイプがあるとしている。次いで⑤については、背後が崖のタイプはフランスのルルドを再現しようとしたもので、オープン・スペースにあるものの場合は、雰囲気を出すために植物が植えられている場合が多いと補足している。そして⑥の場合は、心の癒しのために病院に設置されている例や島原教会のように殉教地や重要な教会施設跡地の石を用いているものなどがそれに当たるとしている。

稿者が実見して回った洞窟模型群も、加藤氏の分類のいずれかに属しているが、それらにあえて付け加えるとすれば、⑦ルルドの洞窟の前を流れるガヴ川との符合物のあるタイプ／ないタイプ、⑧聖母マリア像の仕草や衣の表現に関係する分類、すなわち合掌するマリアが上方を向いているタイプと正面を向いているタイプ、あるいはやや俯いて下方を見ているタイプ、また、衣が風を孕んで揺れているタイプと無風状態にあるようなタイプ、さらに彩色されているタイプと純白のタイプ、などが加えられる。

いずれにしても、長崎大司教区では、これらの諸特徴の幾通りもの組み合わせによって、それぞれ個性ある聖洞窟模型が築造されていると言える。

おわりに

以上、長崎大司教区のルルドの聖洞窟模型の築造例を概観し、類型化についても考察した。最後に概観の結果を総括すれば、

まず、現存する模型の①築造年については、明治時代の例を除けば、大正時代のものは存在せず、殆どが昭和に入ってからのものであったと言える。また昭和期のものの中でも、本河内教会の洞窟模型以外はすべて戦後に築造されたものであったことや、平成に入ってから洞窟模型は各地で積極的に築造され続けていることも明らかとなった。続いて、②築造発起人や築造者は当時の司祭や信徒たちが多く、③築造目的や理由は、多くの場合、身近に自分たちの巡礼地を持ちたいためであったり、何らかの記念のため、また観光客の誘致のためであったりした。さらに④築造場所は、教会の裏や脇の山林の崖、道路と教会の敷地との段差を利用した角地、教会堂の前庭や中庭のオープン・スペースなどであった。

また、聖洞窟模型と同定させるアトリビュートについては、明治期の洞窟模型がフランスのルルドの洞窟に忠実であろうとする傾向が見られるのに対して、戦後の模型には多くの場合小さなベルナデット像が添えられ、規模についても、単洞型の極めて小規模なものから、山の斜面全体を築造した大規模なものまであり、実に多様性に富んでいると言える。とはいえ、多くの洞窟模型において、可能な範囲での祭壇や清水の湧出といったいわゆる細部の再現が認められたのも事実であるし、手水鉢のような浄めの場が布設されていたことも事実である。

さらにマリア像については、衣は白であるが、帯以外の面部や手足にまで彩色が施されている例が多く、この点も戦後の洞窟模型の特徴と言えよう。御像の提供者ない

しは制作者は、すでにフランスやフランス人ではなく、長崎の中田ザビエル工房を中心とする日本の幾つかの聖像制作工房になったと言える。日本における聖像制作者、ないしは工房については未だ十分な調査ができていないが、重要かつ興味深い問題であり、今後解明していく必要があるだろう。なお本稿では、右手にロザリオを掛けていることや、両足に黄色い薔薇を付けていること、また足元に野薔薇が添えられていることといった、すべての御像に共通するアトリビュートについては敢えて言及しなかったことを断っておく。

[註]

- (1) 拙稿「日本における模造ルルド発生考—パリ外国宣教会の日本における再布教との関係から」『崇城大学芸術学部研究紀要』第7号 2013年 49～73頁
- (2) 拙稿「聖母マリアの巡礼地ルルドと天草の模造ルルド群」『崇城大学芸術学部研究紀要』第6号 2012年 73～78頁
- (3) 浦上カトリック教会評議会発行の「神の家」第83号（3）（昭和56年2月1日発行）の＜思い出のアルバム＞コーナーの「本原にルルドが出来る」と同誌第87号（3）（昭和56年6月7日発行）の同コーナー「本原にルルド完成（3）」では、着工は昭和24年10月、完成は昭和25年5月吉日とされている。
- (4) 浜崎晴彦 カトリック飽ノ浦教会『飽ノ浦小教会史』聖母の騎士社 2002年 68頁
- (5) 田平カトリック教会『永遠の潮騒 田平カトリック教会創立100周年』田平カトリック教会 1986年 343頁
- (6) 下窄英知 井持浦小教区『ルルド創設100周年記念誌 井持浦カトリック教会〔1899-1999〕』聖母の騎士社 2000年 144頁
- (7) 『同上』144-145頁
- (8) 加藤久雄「長崎のルルド巡礼」カトリック長崎大司教区監修／長崎巡礼センター・長崎文献社編集『ザビエルと歩く ながさき巡礼』長崎文献社 2008年 148～149頁

[参考文献]（註で挙げたものは除く）（発行順）

- ・50周年記念行事実行委員会編集部『カトリック飽ノ浦教会 創設50周年記念誌』飽ノ浦小教区協議会 1969年
- ・三浦町カトリック教会『三浦町カトリック教会献堂50年誌』三浦町カトリック教会 1981年
- ・25周年誌編集委員会編集『希望のあゆみ—本原小教区25年の歩み—』本原カトリック教会（聖母の騎士社印刷）1985年
- ・カトリック長崎大司教区司牧企画室『長崎の教会 キリシタンの里を訪ねて』聖母の騎士社 1989年
- ・下口薫監修 褥崎カトリック教会編集委員会編集『褥崎128年～褥崎小教区沿革史～』聖母の騎士社 1992年
- ・神ノ島カトリック教会『神ノ島小教会史 神ノ島教会建立100周年記念』聖母の騎士社 1995年
- ・記念誌編集委員会編集 カトリック高島教会発行『献堂40周年記念誌』出島印刷所 2000年
- ・深堀小教区 深堀・善長谷教会『あゆみ』聖母の騎士社 2002年
- ・鈴木 功『西海の天主堂を訪ねて』心力舎 2003年

- ・木村勝彦「深い信仰 ルルド聖地再現」
2003年8月17日（日）長崎新聞
- ・古巢 馨『殉教者の道をゆく―島原半島殉教地めぐり―』島原カトリック教会 2003年（1998年第1刷）
- ・カトリック城山教会『賛美の丘 城山小教区50周年記念誌』聖母の騎士社 2004年
- ・カトリック本河内小教区評議会『本河内教会50周年記念誌』聖母の騎士社 2004年
- ・下山盛朗／カトリック鯛ノ浦教会発行『鯛ノ浦小教区史 鯛ノ浦教会献堂100周年記念』聖母の騎士社 2004年
- ・三沢博昭 川上秀人『大いなる遺産 長崎の教会』智書房 2007年（改訂版第1刷）
- ・板倉元幸『昭和末期の長崎天主堂巡礼』ART BOX インターナショナル 2014年
- ・カトリック中央協議会出版部編『カトリック教会情報ハンドブック2015』カトリック中央審議会 2014年
- ・その他、各教会に関するホームページ

し上げたい。

（巡）小長井教会（萩原栄三郎氏）、湯江教会（岩田精光氏）、八幡町教会（鍋内正志氏）、長与教会（村中 司氏）、三山教会（大水文隆氏）、平戸口カトリック教会、（巡）潜竜教会並びに（巡）江迎教会（主任司祭 下山盛朗師）、出津教会・（巡）大瀬戸教会・牧野教会（片岡久司氏）、上神崎教会（橋本 勲氏）、井持浦教会（野濱達也師）、紐差教会・木ヶ津教会・（巡）大佐志教会（鳥瀬文武氏）、木鉢教会（平本義和氏）、香焼教会、本原教会、鯛ノ浦教会（川内和規師）、頭ヶ島教会関係者（松井義喜氏）、島原教会、神ノ島教会（鶴崎師）、長崎大司教館（古巢馨神父）、浅子教会、浜脇教会

またマリア像やベルナデット像については、中田ザビエル工房様にご教示、ご確認頂いた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

〔図版出典〕

図1：稿者作成

図2～21：稿者撮影

〔謝辞〕（順不同）

本稿執筆に際しては、以下の個人、並びに機関の資料提供や閲覧許可等の御協力を頂いた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

カトリック長崎大司教区附属図書室（長野宏樹氏）、長崎歴史文化博物館図書室、長崎県立図書館

また、調査票の発送による調査に御回答、並びに電話による照会にお答え下さった下記教会や関係者にもこの場をお借りしてお礼申

地区Ⅰ 長崎中地区



図2 小峰の聖洞窟模型 昭和28～29年
両像とも中田ザビエル工房作



図3 本原教会の聖洞窟模型 昭和62年
両像とも制作者不詳

地区Ⅱ 長崎南地区



図4 本河内教会の聖洞窟模型 昭和7～14年
マリア像：制作者不詳 ベルナデット像：中田ザビエル工房



図5 (巡) 善長谷教会の聖洞窟模型 昭和32～33年
マリア像：制作者不詳
ベルナデット像：中田ザビエル工房作

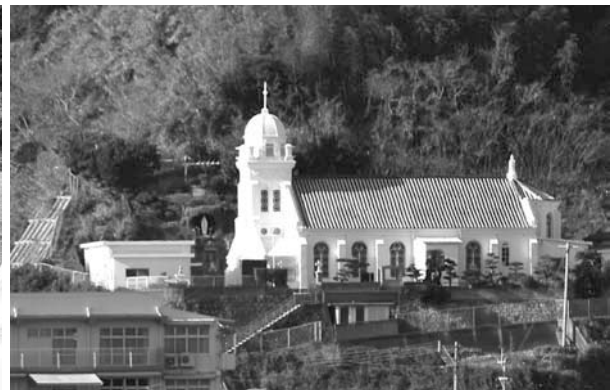


図6 神ノ島教会の聖洞窟模型 昭和53年
マリア像：中田ザビエル工房作



図7 (巡) 高島教会の聖洞窟模型 昭和53年
両像とも中田ザビエル工房作

地区Ⅲ 長崎北地区



図8 (分) 小長井教会の聖洞窟模型 平成6～11年
マリア像はイタリア製 ベルナデット像：中田ザビエル工房作

地区Ⅳ 佐世保地区



図9 三浦町教会の聖洞窟模型 昭和43年
両像とも中田ザビエル工房作

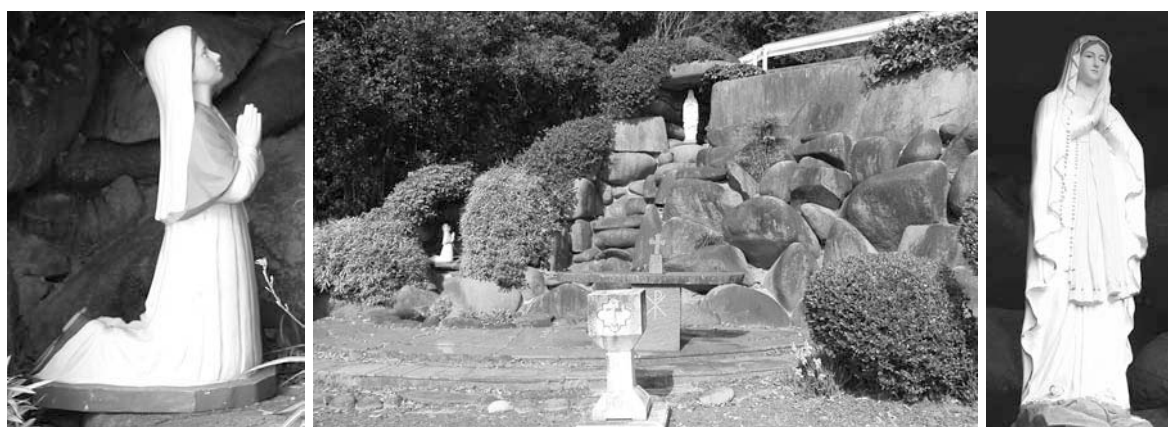


図10 旧神崎教会の聖洞窟模型 昭和63年
両像とも中田ザビエル工房作



図11 浅子教会の聖洞窟模型 平成15年 両像とも中田ザビエル工房作

地区V 平戸・北松浦地区



図12 宝亀教会の聖洞窟模型 昭和63年 マリア像：制作者不詳

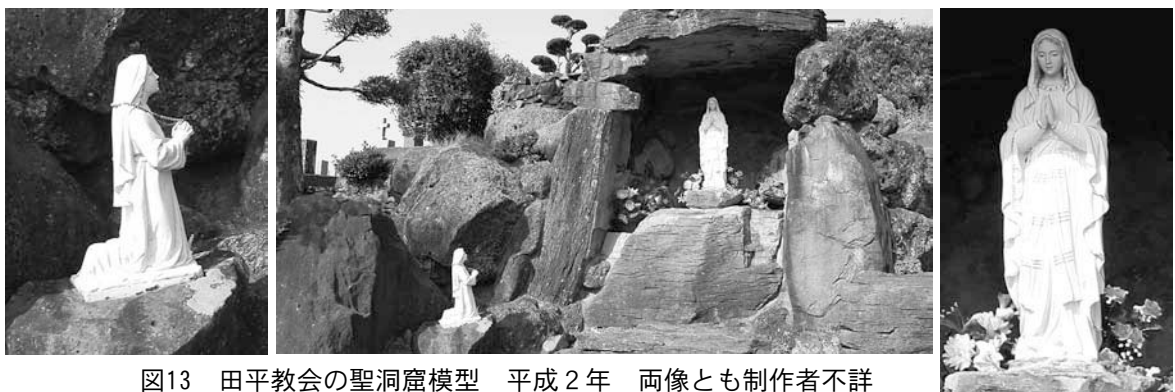


図13 田平教会の聖洞窟模型 平成2年 両像とも制作者不詳



図14 平戸ザビエル教会の
聖洞窟模型
平成18年
両像とも中田ザビエル
工房作

地区Ⅵ 上五島地区



図15 鯛ノ浦教会の聖洞窟模型 昭和38年
マリア像：中田秀和作
ベルナデット像：中田ザビエル工房作



図16 (巡) 中ノ浦教会の聖洞窟模型 昭和48年
マリア像：中田ザビエル工房作



図17 曽根教会の聖洞窟模型 昭和49年
マリア像：中田ザビエル工房作



図18 (巡) 米山教会の聖洞窟模型 平成元年
マリア像：制作者不詳

地区Ⅶ 下五島地区

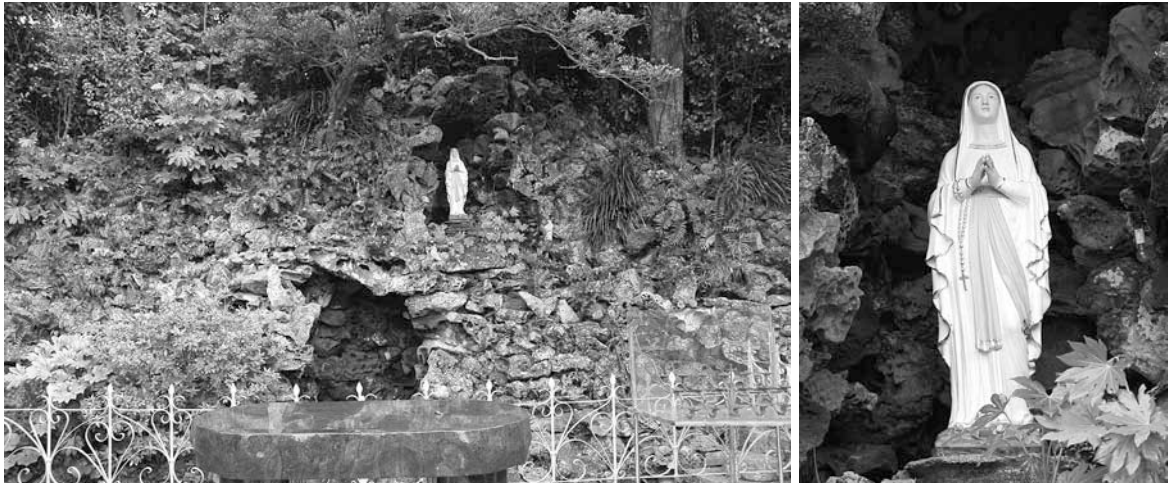


図19 井持浦教会の聖洞窟模型 明治32年 マリア像：フランス製



図20 水ノ浦教会の聖洞窟模型 昭和30年
両像とも制作者不詳



図21 福江教会の聖洞窟模型 昭和51年
マリア像：制作者不詳

表1 長崎大司教区のルルドの聖洞窟模型（主に教会敷地内、築造年順）

凡例：M：明治 T：大正 S：昭和 H：平成 /O.S.：オープンスペース /マリア像：M ベルナデット像：B

	番号	教会・修道院名 (例外含む)	献堂対象	教会堂建設年 (完成)	ルルドの洞窟 模型築造年	築造発起者・築造者	築造費出資者	御像制作者・ 製造者	築造目的・その他	築造場所
地区Ⅰ (長崎中 地区)	1	例外) 小峰 (本原の住 宅地)			S28(1953)～ S29(1954)	発起人：フランシスコ 会修道士ヨゼフ岩永 設計：同ヨゼフ岩永＋ 浦川健一協力 施行：浦川健一＋フラン シスコ会第三会有志	不詳	M：中田ザビ エル工房 B：中田ザビ エル工房	原爆で精神的・ 肉体的打撃を受 けた人々の心を 支えるため	昔から清水が流れ、 逸話やいわれもある 「最後水」(地名) /フランスの ルルドにやや似た 環境
	2	城山教会	慰めの聖母	旧聖堂：S30(1955) 新聖堂：H12(2000)	S33(1958)	クルバ神父発案	クルバ神父 の姉の援助 ＋信徒の労働奉仕	不詳	不詳	聖マリア学院小学 校校舎下の低い崖
	3	本原教会	聖ペテロ・ パプチスタ	S27(1952) 仮小屋、 S34(1959) 長崎の 仮聖堂の移転、 S37年新聖堂	S62(1987)	不詳	不詳	M：元小峰に あったものを 移設、制作者 不詳、 B：不詳	先祖の信仰の遺産の 継承のため	聖堂の裏山(一本 木山)の崖
地区Ⅱ (長崎南 地区)	1	本河内教会 (聖母の騎士 修道院)	無原罪の 聖母	旧聖堂：S5(1930)? 新聖堂：S39(1964)	S7(1932)開設 S14(1939)造成 工事完成	コルベ神父	不詳	M：不詳、 B：中田ザビ エル工房	フランスのルルドを 訪れて建設 決意	修道院の裏山の崖
	2	(巡)善長谷 教会	無原罪の 聖マリア	初代M28(1895) (木造)、 S27(1952)(再建)	S32着工、 S33(1958) 完成・祝別	古川重吉師(中町教会 主任司祭) 庭師の田 中氏指導 信徒の奉仕	不詳	M：不詳、 B：中田ザビ エル工房	不詳	聖堂裏の少し離れた 山の崖
	3	(巡)岳教会	使徒 聖ヨハネ	S45(1970)	初代： 岳の山中 S39(1964) 2代目： 教会敷地内 H4(1992)	不詳	不詳	M：中田ザビ エル工房 M：不詳	マリア像(久保 辰一氏寄贈)も 山中から平成8 年に教会の港の 見える場所に移 設	最初は聖堂に至る 山の中 → 聖堂 入口の向かって右 脇の低い崖
	4	神ノ島教会	聖フラン シスコ・ ザビエル	M30(1897)	S53(1978)	信徒	不詳	M：中田ザビ エル工房	信徒の希望 大森氏の協力	聖堂向かって左脇 の山の崖
	5	(巡)高島 教会	イエスの み心	旧聖堂：M24(1891) 新聖堂：S29(1954)	S53(1978)	一級造園士ミカエル田 中秀幸、主任司祭ヨゼ フ紙崎忠男、信徒	不詳	両像とも中田 秀和(中田ザ ビエル工房)	不詳	聖堂向かって左脇 の崖

地区Ⅲ (長崎北地区)	1	島原教会	日本26聖人殉教者	初代：S7(1932) 新聖堂：H9(1997)	H9(1997)頃？	不詳	不詳	不詳	島原半島の殉教者たちのマリアへの思いを表現するため。島原半島の殉教地やセミナリヨ発祥地から集めた自然石も使用	聖堂向かって左側の塀沿いの O.S.
	2	(分)小長井教会	無原罪の聖母	S28(1953)	H6(1994)～ I1(1999)	コンベンツァル聖フランシスコ修道会 小長井修道院（作業者：浜口宏衛修道士、田川勇一、田川義孝各氏）	修道院約500万（約5年かかる）	M:イタリア製 B: 中田ザビエル工房	不詳	山林の斜面
地区Ⅳ (佐世保地区)	1	三浦町教会	イエスのみ心	S6(1931)	S43(1968)	不詳	不詳	M: 中田ザビエル工房、 B: 中田ザビエル工房	不詳	教会の中庭の O.S.
	2	褥崎教会	聖ペテロ	S47(1967)	S61(1986)	不詳	不詳	不詳	不詳	十字架山の山上
	3	旧神崎教会	聖ベネディクト	S58(1930)	S63(1988)	司祭、経済評議員、信徒、藤山石産建設会社代表取締役社長？	寄附（町の名士、純心聖母会、信徒…）	M: 中田ザビエル工房、 B: 中田ザビエル工房	教皇ヨハネ・パウロ二世が制定した特別聖母年が契機	旧聖堂向かって左側の山の崖
	4	浅子教会	聖母の汚れなきみ心	S5(1930)	H15(2003)	楠本雪男	不詳	M: 中田ザビエル工房、 B: 中田ザビエル工房	献堂75周年記念、小教区独立50周年記念	①信徒会館前の塀沿いの O.S.、 ②信徒会館裏山の崖
地区Ⅴ (平戸・北松浦地区)	1	宝亀教会	聖ヨセフ	M31(1898)	S63(1988)	不詳	不詳	不詳	改築落成、献堂90周年	門柱の右脇の狭い O.S.
	2	田平教会	日本26聖人殉教者	T4(1915)	H2(1990)	不詳	不詳	不詳	不詳	正門左下の低い崖
	3	平戸ザビエル記念教会	大天使聖ミカエル	S6(1931)	H18(2006)	不詳	不詳	M: 中田ザビエル工房、 B: 中田ザビエル工房	ザビエル生誕500周年記念、献堂75周年記念	聖堂へ向かう階段の右脇(低い段差)

地区 VI (上五島地区)	1	鯛ノ浦教会	聖家族	最初 (M14) 2 代目 (M36) 3 代目 (S54)	S38 (1963)	発案：中田秀和 提案：浜口健一師 設計：中田氏 工事主任：戸村初行氏	不詳	M：中田秀和作 B：中田ザビエル工房	自分たちのルルド参詣地をもちたいとの願いによる／大聖年記念	教会の敷地に隣接する山林の崖
	2	(巡)中ノ浦教会	おとめ聖マリア	T14 (1925)	S48 (1973)	不詳	不詳	M：中田ザビエル工房	不詳、マリア像は司祭もしくは信徒からの寄贈？	聖堂向かって左側の山林の崖
	3	曾根教会	無原罪の聖母	旧聖堂：M34 (1901) 頃 新聖堂：S41 (1966)	S49 (1974)	主任司祭村中司神父指導 信徒の濱田組協力	不詳	M：中田ザビエル工房	現地や近隣の石を採集、聖堂入口上に無原罪の聖母像	聖堂向かって右下の山林の低い崖
	4	(巡)米山教会	聖アンデレ	最初 (M36) 現在 (S52)	H元 (1989)	白浜満神父	不詳	不詳	司祭叙階記念として同教会出身の白浜神父が寄贈	聖堂裏の右隅のコンクリートで固められた崖
	5	(巡)猪ノ浦教会	聖イシドロ	初代：大正期 新聖堂：H元 (1989)	H元 (1989)	主任司祭小瀬良明神父	不詳	製作者不詳、大曾教会主任浜口末雄神父寄贈	洞窟：石は近くの河原から採集	聖堂脇の岩谷
	6	(巡)頭ヶ島教会	聖ヨセフ	初代 (M23) 2 代目 (M43～T6)	S56 (1981)～ S63 (1988) の いずれかの年	熊谷森市神父か？	不詳	原型は外国製 (中田サビエル工房で造り替えて設置)	不詳	聖堂裏の右隅コンクリートで固められた崖

地区Ⅶ (下五島 地区)	1	井持浦教会	ルルドの 聖母	M30(1897) S62(1987)改装	M32(1899)	アルベルト・ペルー神 父	不詳	M:フランス製 (鋳造) (造り替へは 中田ザビエル 工房)	洞窟:奇岩、美石 は信徒持参	聖堂の裏山の崖 (聖堂向かって左 下)
	2	水ノ浦教会	被昇天の 聖母	最初の教会 (M13) 現在の教会 (S13)	S30(1955)	浜崎渡師の指導下で建 設	不詳	不詳	聖母への祈りの 場が欲しいとの 信徒の願いによ る、洞窟の石は 水ノ浦湾入口の 漁津ヶ崎の磯の 石	聖堂前庭 (聖堂向 かって左側)
	3	三井楽教会	諸聖人	最初 (M13) 現在 (S46)	初代 (年代不詳) 2代目 S47(1972)	田中千代吉神父か?	不詳	不詳	聖母への信仰を 深める為 現在 のルルド以前に も小ルルドあり (年代不詳) /近 くにお告げのマ リア修道会あり 前庭に「十字 架の道行」あり	資料館の向かって 右奥の垣根沿いの O.S.
	4	浜脇教会	イエスの み心	S6(1931)	初代:不明 2代目: S50(1975)	不詳	不詳	M:中田ザビ エル工房	初代:井持浦ル ルドのようなル ルドが欲しいと の思いによる 2代目:不詳	初代:旧司祭館裏 2代目:聖堂裏山 の崖
	5	福江教会	イエスの み心	創設 (T3) 教会堂 S37(1962)	初代: S38(1963) 2代目: S51(1976)	初代:松下佐吉神父と 当時の経済評議員 2代目:岩永薫師	不詳	不詳	初代:1962年の 福江大火の焼失 を免れたことへ の感謝 2代目:老朽化 と車社会のニー ズに応じる為/ 前庭部の西欧と 五島の地図上に ルルドの位置明 示	初代:正門左脇 2代目:聖堂向 かって左脇の O.S.
	6	奈留教会	聖フラン シスコ・ ザビエル	初代:M32(1899) 新聖堂:S36(1961)	H10(1998)	主任司祭田口神父が建 設企画 長崎の田中庭園建造	不詳	M:中田ザビ エル工房、 B:中田ザビ エル工房	献堂30周年記念 下五島地区長 浜崎渡神父が祝 別	教会中庭の O.S.